

《論 説》

ホッブズにおける近代的平等論の成立

ーアリストテレス批判から黄金律へー

新 村 聡

- 1 はじめに
- 2 ホッブズのアリストテレス奴隷制論批判
 - 2.1 アリストテレスの奴隷制正当化論
 - 2.2 ホッブズのアリストテレス批判
- 3 権利の平等
- 4 黄金律と自他の平等
 - 4.1 平等原理としての黄金律
 - 4.2 自然法における自他の平等
 - 4.3 平等と自己保存の関係
- 5 分配的正義の転換
 - 5.1 古代的な分配的正義への批判と必要原理
 - 5.2 労働所有論と所得再分配
- 6 むすび

1 はじめに

平等論はしばしば近代に固有の思想とみなされている。たしかにすべての人間の権利の平等という思想は近代になって初めて登場した。しかし古代思想に平等論がなかったわけではない。プラトンやアリストテレスは正義論の重要な主題として平等について論じている。では近代の平等論は、古代の平等論から何を継承し、何を転換したのであろうか。近代の思想家のだれが、どのようにして、平等論の転換をなしとげたのであろうか。こうした問題を考察することは、近代平等論の特質を理解する上で非常に重要な意義を有する。

本稿は、近代西欧を代表する思想家の一人であるトマス・ホッブズ (Thomas Hobbes) が、古代平等論を近代平等論へ転換する上で果たした重要な役割について考察することを課題としている。

古代のアリストテレスは、『政治学』において、人間の能力の自然的不平等を理由として、主人と奴隷の不平等な関係は自然的であり正しく有益であると主張した。ホッブズは『リヴァイアサン』に

においてアリストテレスのこの見解をきびしく批判し、すべての人間の権利の平等を主張する。そのときホッブズは、3つの論拠を示している。第1に、人間の心身の能力は全体として見ればほとんど平等であること、第2に人間の能力の不平等は教育と経験の産物であること、第3に能力が不平等であるとしてもすべての人間の権利は平等であるべきことである。従来のホッブズ研究では第1の自然的平等論が注目されてきたが、近代の平等思想に大きな影響を与えたのは主として第2と第3の論拠であり、とりわけ能力から独立に権利の平等が存在するという第3の論拠は、以下で述べるように、ホッブズ平等論の思想的出発点になったと考えられる。

本稿は、アリストテレス批判を通じて形成されたホッブズ平等論の特質として、とくに次の3点が重要であると考ええる。第1は権利の平等、第2は平等原理としての黄金律、第3は分配的正義の転換である。それぞれについて問題の所在を説明しておく。

ホッブズ平等論でもっとも注目すべきは、すべての人間の権利の平等の主張である。古代では、もっとも平等な政体である民主政においても、平等とされる人間の範囲は自由人男性に限定されており奴隷や女性は除外されていた。自由人と奴隷の不平等も男性と女性の不平等も自明のこととされていたのである。その意味で古代の平等は限定的な平等であった。これに対して、近代の人権の平等では普遍的平等つまりあらゆる人間の平等が基本理念とされ、身分差別や男女差別が批判される。ホッブズは、歴史上初めてあらゆる人間の権利の平等を明確に主張した思想家であった。

ではホッブズは、すべての人間の権利の平等をどのように論証したのであろうか。従来のホッブズ研究では、ホッブズの権利概念として自然権が注目されてきた¹⁾。しかしホッブズの権利論においてより重要なのは、人々が自然権を放棄する社会契約によって新たに形成する人為的権利である。以下で詳述するように、ホッブズは権利の成立について「権利の引き算」とも呼ぶべき独創的な方法を考案している。すなわちホッブズは、最初に人々がすべてのものに対する自然権を有する自然状態を仮定し、次に人々が自然権のある部分を放棄して他の部分を留保する社会契約によって平等な私的権利を形成すると論じるのである。

この場合に、各人が留保する私的権利の平等はどのようにして実現するのであろうか。この平等は、各人が自己の留保する権利と他者の留保する権利とを比較して、両者が等しくなるように自己の留保する権利を自制することによって実現する。ではなぜ各人は、自己の留保する権利と他者の留保する権利とが平等であるべきと考えるのであろうか。これに対するホッブズの回答は、「自分がしてほしいことを他人に行え」と「自分がしてほしくないことを他人に行うな」という黄金律 (golden rule) である。

それゆえホッブズ平等論の注目すべき第2の特質は、平等原理としての黄金律である。ホッブズは、自然法論において、平等の望ましさを判断する2つの原理について述べている。1つは、平等の帰結として実現される社会の平和と自己保存の理性的認識であり、もう1つは、自己と他者の平等の望ましさを直観的に判断する原理としての黄金律である。では黄金律はどのようにして認識され、自己保存とどのような関係にあるのだろうか。

1) レオ・シュトラウスが、「近代政治論は『権利』から出発し、古代政治論は『法』から出発することによって原理的に区別される」と主張するとき、自然権が自然法に先行するというホッブズの見解が念頭に置かれている (Strauss, 1952)。

ホッブズ平等論の第3の特質は、分配的正義の転換である。分配的正義は、本来は分配における正義または正しい分配を意味し、具体的内容は歴史的に大きく変化してきた。古代の分配的正義では、公職を各人の「価値（merit）」（能力・富・家柄・自由人身分など）に応じて分配することが主張され、近代の分配的正義では、所得を各人の「労働」「資産」「功績」「必要」などに応じて分配することが問題となる。ホッブズの分配的正義論には古代的な概念と近代的な概念とが並存しており、かれは分配的正義の古代的概念が近代的概念へ転換する過渡期に位置する思想家であったと考えられる。ではホッブズの思想は、この転換においてどのような役割を果たしたのであろうか。

以下、第2節でホッブズのアリストテレス奴隷制論批判、第3節で平等な権利の成立、第4節で黄金律、第5節で分配的正義の転換について考察する。

2 ホッブズのアリストテレス奴隷制論批判

2.1 アリストテレスの奴隷制正当化論

アリストテレスが『政治学』第1巻第5章で奴隷制の正当化論を主張したことはよく知られている。アリストテレスは、能力の優れたものが劣ったものを支配することは自然であり、それゆえ正しく有益であるということを論拠として、奴隷制を正当化している。かれは、優れたものが劣ったものを支配する例として、魂による肉体の支配、理性による情念の支配、人間による動物の支配、男性による女性の支配の4つをあげて奴隷制度を正当化している。かれは言う。

「男性と女性との関係について見ると、男性は自然によって優れた者であり、女性は劣った者である。また、男性は支配する者であり、女性は支配される者である。このことはすべての人間においても同様である。だから、魂に肉体が、また人間に動物が劣るのと同じくらい他の人々に劣る人々（このような状態にある人々は、その働きが肉体を使用することにあって、かれらができる最善のことはそれ以外にないという人々のことである）は、誰でもみな自然によって奴隷である。……自然によってある人々は自由人であり、ある人々は奴隷であるということ、そして、後者にとっては奴隷であることが有益であり正しいということは明らかである。」（Aristotle, 1995: 16-17, 訳42-43）

アリストテレスの奴隷制正当化論は、論理的に見れば帰納法と演繹法（三段論法）の組み合わせである。かれは、自然のさまざまな支配関係を観察することから「能力の優れたものが劣ったものを支配することは自然であり、正しく有益である」という一般命題を帰納する（大前提）。次に主人と奴隷の自然的能力が不平等であることを理由として（小前提）、主人の奴隷に対する支配の正当性を演繹するのである（結論）。アリストテレスは、人間の能力差が先天的であることについて、「生まれる早々からある場合には相違があり、ある者は支配されるようにできており、またある者は支配するようにできている」と述べている（Aristotle 1995: 15, 訳40）

アリストテレスは、奴隷制正当化論と政治学の平等論の関係を明示的には述べていない。しかし奴隷制の基本原理は能力に応じて支配権を与えることであり、これは原理的には能力に応じて支配権を

与える貴族政（アリストクラティア）によく似ている。両者はいずれも能力と支配権に関する比例的平等の一種である²⁾。

一般的に言って、人間は平等の正しさを直観的に判断する能力を持つのに対して、不平等の正しさを直観的に判断する能力を持っていない。そのため、不平等正当化論つまり不平等の正しさを論証する議論が生まれる。代表的なものは2つあり、1つは、不平等が帰結としてもたらす利益を理由とする帰結主義的不平等正当化論である。帰結としての利益が個人的であれば利己主義的な正当化論に、また社会的であれば功利主義的な理論になる。

もう1つは、ある不平等がより重要な別の平等の原因または結果であるとして正当化する平等主義的不平等正当化論である。この議論は比例的平等論（比率平等論）に基づくことが多い。というのも、比例的平等では平等と不平等は表裏一体の関係にあり、比率に注目すれば平等に、結果に注目すれば不平等になるからである。たとえば、時間給が平等でも労働時間が異なれば結果として受け取る賃金総額は不平等である。能力に比例して支配権を分配する貴族政や奴隷制において、結果に注目すれば支配権の不平等な分配であり、比率に注目すれば能力と支配権の比率の平等となる。アリストテレスの奴隷制正当化論は、他の比例的平等論と同様に、比率の平等を理由として結果の不平等を正当化する思想なのである。

以上、アリストテレスの古典的な奴隷制正当化論を説明した。この見解はホッブズによって全面的に批判される。その考察の前に、アリストテレスの見解がそれほど単純ではなかったことも指摘しておかなければならない。というのも、かれは『政治学』第1巻第5章で上述の自然的奴隷制正当化論について述べた後、第6章では、実在する奴隷制が必ずしもつねに自然的能力の不平等に基づく自然的奴隷制ではないことを明確に指摘しているからである。多くの奴隷は戦争による捕虜であり、その中には優れた能力を持つ奴隷は少なくなかった。また生まれた時から奴隷である者も、能力が必ずしも劣っているわけではなかった。アリストテレスは、奴隷の教育がなされていることも指摘している。つまり生まれた時から奴隷である者は、教育によって高い能力を身につけても奴隷身分のままなのである。したがって、アリストテレスは、能力が優れているか劣っているかという自然的事実と、自由人か奴隷かという社会的身分とがしばしば対応しないことを十分に認識していたといえる。アリストテレス自身が第6章で述べた奴隷制批判は、ホッブズなどの近代の奴隷制批判論者へ大きな示唆を与えた可能性がある。

2.2 ホッブズのアリストテレス批判

アリストテレスの奴隷制正当化論に対して、ホッブズは3つの論拠に基づいて批判している。そのうち第1と第2の論拠は上述の3段論法の小前提（能力の不平等）を批判し、第3の論拠は大前提（能力に比例する支配）を批判するものである。それぞれについて検討する。

ホッブズが示す第1の論拠は、人間の自然的能力の平等すなわち自然状態における人間能力の平等である。ホッブズは言う。「完全な自然状態では、だれがよりすぐれた人間かという問いは存在しない。

2) アリストテレスは、主人の奴隷に対する主人的支配（命令と服従）と、政治家の市民に対する政治家的あるいは王的支配（説得と同意）を区別している（cf. Aristotle, 1995: 16, 訳41）。

そこでは……すべての人間が平等である」(*Leviathan*, 107, 訳(1)248)。ホッブズは、自然的平等の理由として、人間の身体または精神の能力を別々に見れば不平等であるとしても、心身の能力を全体として見ればほとんど平等であると主張する。

「自然は人々を身体と精神の能力において平等に造ったので、その程度は、ある人が他の人よりも身体において明らかに強いとか、精神の動きがはやいということがときどき見られるにしても、すべてを一緒にして考えれば、人と人の違いはある人がその違いに基づいて他人がかれと同様には主張できないような便益を主張できるほどに顕著なものではない。」(*Leviathan*, 86-87, 訳(1)207)

第2の論拠は、人間の能力の不平等が生得的・先天的ではなく、教育と経験によって後天的に形成されることである。ホッブズは精神の能力は身体的能力よりもいっそう後天的であると述べている。なぜなら科学的能力は教育と経験によって後天的に形成されるものであり、また「慎慮はたんなる経験であり、経験は等しい時間がすべての人々にかれらが等しく専念するものごとについて与えるものだからである」(*Leviathan*, 87, 訳(1)207-208)。

古代のプラトンやアリストテレスも人間能力の発達における教育と経験の役割を非常に重視していた。プラトンの『国家』と『法律』の論述のかなりの部分が教育論である。またプラトンが高等教育機関のアカデメイアを、アリストテレスがリュケイオンを創設したことはよく知られている。しかしプラトンは、教育は子供の素質に応じてなされるべきであり、最初に素質を見きわめることが重要であると考えた。かれは『国家』で、子供を素質に応じて金銀銅鉄の種類に分けて、それぞれの素質に応じた教育をするべきであると主張している (Plato, 2008: 415c)。

アリストテレスが素質と教育のどちらを重視したかは微妙な問題である。というのも、上述のように、かれは『政治学』第5章では「生まれる早々から……ある者は支配されるようにできており、またある者は支配するようにできている」と生得能力論を述べる一方で、第6章では奴隷の教育に言及しているからである。しかし近代において一般にアリストテレスの見解と見なされ、ホッブズが批判の対象としたのは前者の能力生得論つまり素質決定論であった。近代の平等主義思想は、人間能力の発達において教育・経験は素質よりもはるかに重要であると考え³⁾。ホッブズは人間能力の大部分が教育・経験によって形成される後天的なものであると主張する近代的平等論の先駆者の一人であった。

以上に述べた第1と第2の理由で、ホッブズが強調するのは人間の能力または素質の平等であり、いわば事実における平等である。しかしホッブズが最終的なねらいとしたのは、人間の権利の平等を示すことであった。そしてアリストテレスの奴隷制正当化論が、各人の能力の不平等という事実を根拠として権利の不平等を演繹する三段論法を用いていたので、ホッブズは能力の平等という事実を示すことによって、アリストテレスの見解を批判したのである。

3) アダム・スミスは、哲学者と荷物運搬人の能力差は生得的ではなく職業経験から生ずると主張している (cf. Smith, 1976: 28, 訳I, 28)。

ホッブズが示す平等の第3の理由は、能力の平等と権利の平等の次元が異なることである。この理由では、人間能力についての客観的な事実と主観的な評価との乖離が強調されている。もし人間の能力と権利がそれぞれ事実と価値という別次元の問題であるならば、能力がどれほど不平等であっても権利は平等であると主張できる。事実と価値の分離に基づく権利の平等の主張こそ、ホッブズが権利論で最終的に意図することなのである。

ホッブズは、能力が不平等であるにもかかわらず、人々はどうも自然から自分たちを平等と思うことを指摘している。「この平等を信じがたいものとするのは、おそらく人が自分の知恵についていただくぬぼれである。……というのは、人々は自分の知力を近くに見て他人を遠くに見るからである。」(Leviathan, 87, 訳(1)208) 人間の視覚において近くのものより遠くのものより大きく見えるように、人々は自分の知力を他人の知力よりも高く評価しがちであり、その結果、人々は知力の不平等に比例する権利の不平等を承認せず、知力から独立に権利の平等を求めるとするのである。

またホッブズは、第9自然法で、能力がたとえ不平等であっても、自己統治の権利は平等であるべきことを次のように主張している。

「他の人々に統治されるよりも、自分で自分を統治したいと思わない愚か者はきわめてまれにしかない。……したがって、もし自然が人々を平等に造ったなら、そのような平等は認められるべきである。また、もし自然が人々を不平等に造ったとしても、自分たちは平等だと思ふ人々は、平等な条件でなければ平和の状態に入ろうとしないから、そのような平等は認められなければならない。」(Leviathan, 107, 訳(1)249)

ここでホッブズが、「もし自然が人々を不平等に造ったとしても……平等は認められなければならない」と述べていることはきわめて重要である。ホッブズは、アリストテレスの論証の大前提である能力と権利の比例関係を否定し、能力の平等または不平等という事実とは無関係に人間の権利は平等であると主張するのである。このような能力と権利つまり事実と価値の完全な分離こそ近代の権利平等論の大きな特徴であり、ホッブズはそれを明確に主張しているのである。

しかし、能力の不平等にもかかわらず権利が平等であるとしたら、その権利の平等はどのようにして論証できるのであろうか。これこそホッブズが直面した思想的難問であった。ホッブズは、自然状態におけるすべてのものへの自然権から出発して、人々が社会契約によってある自然権を放棄し、そのとき放棄されずに留保された自然権を新たな人為的権利として構成するという「権利の引き算」とも呼ぶべき独創的な方法を考案する。これを次節で説明する。

3 権利の平等⁴⁾

ホッブズは、すべての人間が自己の生命・身体・自由・財（労働成果、自己保存の必要物）に対して平等な権利を有することを論証するために、「権利の引き算」とも呼ぶべき独創的な方法を考案し

4) ホッブズの権利成立論については、新村（2016a）を参照。

ている。「権利の引き算」は次の3段階の論理によって構成される。

- 第1段階（自然状態） すべて的人是はすべてのものに対する自然権（A）を有する
- 第2段階（第2自然法） 人々は自然権の一部（B）を放棄する社会契約を結ぶ
- 第3段階（第10自然法） 社会契約で放棄されずに留保された権利（ $A - B = C$ ）が排他的私的権利となる

以下では、この3段階について説明する。出発点は、すべての人がすべてのものに対して自然権を有する自然状態である。ホッブズは「そのような状態において、各人はあらゆるものに対して、相互の身体に対してさえ権利を持つ」（*Leviathan*, 92, 訳(1)217）と述べている。この自然状態では、すべての人がすべてのものに対して、つまり自分自身だけでなくすべての他者の生命・身体・自由・財に対して自然権を持つ。この状態には、本来の権利すなわちそれを侵害しないように他者を義務づける排他的私的権利は存在せず、自己の生命・身体・自由・財はいつでも他者に奪われる可能性がある。

そこで人々は、自己保存を実現するために平和の追求と自己防衛を命ずる次の基本的自然法を認識する。「だれでも平和を獲得する希望がある限り平和のために努力するべきであり、平和を獲得できないときには戦争のあらゆる助けと利点を求め利用してもよい。」（*Leviathan*, 92, 訳(1)217）そしてこの基本的自然法から、次の第2自然法が導かれる。「人は、他の人々もそうする場合に、そして平和と自己防衛のためにそうすることが必要であると自分が考える限り、すべてのものに対するこの権利を進んで放棄するべきであり、かれが他の人々に対して持つ自由は、他の人々がかれに対して持つことを許せる範囲で満足すべきである。」（*Leviathan*, 92, 訳(1)218）

人々はこの第2自然法の命令に従ってすべてのものに対する自然権を相互に放棄する社会契約を結び、平等な排他的私的権利の制度を人為的に導入するのである。ホッブズは、第2自然法で、すべてのものに対する権利を放棄するように述べた後、放棄することはできず各人に留保される権利について次のように述べている。

「人は、自分の生命を奪おうとして力づくで襲いかかる人々に対して抵抗する権利を放棄することはできない。……同じことは、傷害、鎖、投獄の場合にも言える。……そして最後に、このような権利の放棄または譲渡が行われる動機および目的は、自分の人身の安全、すなわち生命の安全と生活に飽くことのないように生活を維持する手段を確保することにある。」（*Leviathan*, 93, 訳(1)221）

つまりすべてのものに対する自然権を相互に放棄するとき留保されるのは、(1)自己の「生命」に対する権利、(2)「傷害」に抵抗して守られる身体への権利、(3)「鎖、投獄」に抵抗して守られる自由への権利、(4)「生活に飽くことがないように生活を維持する手段」すなわち財への権利である。

したがって、第2自然法が意味することは、各人が本来持っているすべてのものに対する自然権（A）のうち、他者の生命・身体・自由・財に対する自然権（B）を相互に放棄することによって、放棄されずに留保される自己の生命・身体・自由・財に対する権利（ $A - B = C$ ）を享受することを他者によ

て妨げられないようにすることである。そのときに、放棄されずに留保される自己の生命・身体・自由・財に対する権利（C）は、その享受を妨げないように他者を義務づけるという意味において社会的に承認された排他的私的権利となる。こうして、当初のすべてのものに対する自然権（A）から、社会契約によって相互に放棄される自然権（B）を引き算する結果として、放棄されずに留保される権利（ $A - B = C$ ）が新たな私的権利として成立するのである。この私的権利は、それを侵害せずに尊重する義務を他のすべての人々に負わせるという点で、語の本来の意味における権利である。自然状態においてすべての人がすべてのものに対して有する自然権（A）は、他者を義務づけることもなく、排他性もなかった。これに対して、「権利の引き算」を行う社会契約によって新たに人為的に形成される権利（C）こそ、侵害しないように他者を義務づける排他的権利であり、本来の意味における権利なのである。こうして各人の生命・身体・自由・財に対する平等で排他的な私的権利が成立する。この「権利の引き算」においてもっとも重要なのは、すべてのものに対する本源的な自然権（A）でもなければ、社会契約によって放棄される自然権（B）でもなく、両者の差（ $A - B = C$ ）つまり放棄されずに留保される権利である。そしてこの留保される権利は、自然権を相互に放棄する社会契約という人為によって初めて成立するのであるから、人為的権利とみなしうる。社会契約という人々の共同的社会的行為によって、自然権は人為的権利へ転化するのである。このような、自然権を放棄する社会契約によって人為的権利が社会制度として成立するという見解こそ、ホッブズ権利論の思想的核心理念である（新村，1994: 38-44）。

4 黄金律と自他の平等

4.1 平等原理としての黄金律

ホッブズは、あらゆる自然法が自己保存に役立つと考える。したがって自然法の規範的根拠となる原理の一つは自己保存である。さらにホッブズは、第2自然法について説明するときに、あらゆる自然法の規範的根拠となるもう1つの原理である平等について述べている。かれは、第2自然法で、「自分が他の人々に対して持つ自由は、他の人々が自分に対して持つことを許すのと同じ程度」であるべきだと主張する。つまり自然権の部分的な相互放棄による人為的権利の成立は、各人が放棄せずに自分自身に留保する権利（＝自由）の平等を内包しているのである。この点で第2自然法は自他における権利の平等を意味している。

そしてこの権利の平等を基礎づける原理が「黄金律（golden rule）」である。ホッブズは、第2自然法が「他人から自分にしてほしいすべてのことをあなたが他人に行え」という「福音書の法」と同じであると述べ、さらに「自然法を容易に検査できる法則」または「わかりやすい要約」として「あなたが自分自身にしてほしくないことを他人に行うな」をあげている。

「自分にしてほしいことを他人に行え」と「自分にしてほしくないことを他人に行うな」という2つの原理は一般に「黄金律」と呼ばれている。黄金が他のすべての金属の上位にあるもっとも価値ある金属であるように、「黄金律」は他のすべての社会規範の上位にあるもっとも価値ある社会規範を意味している。キリスト教の福音書だけでなく、ユダヤ教、イスラム教、『論語』などにも同様の記

述があり、古今東西に共通する社会規範である。ヨーロッパでは「黄金律」という用語は16世紀ころから使用されていたといわれる。ホッブズ自身はこの語を用いているわけではないが、かれが「福音書の法」または「自然法を容易に検査できる法則」と呼んでいる平等原理が黄金律に相当することは明らかである。

黄金律に関する一つの問題は、「自分にしてほしいことを他人に行え」という積極原理（ホッブズのいう「福音書の法」）と、「自分にしてほしくないことを他人に行うな」という消極原理（ホッブズのいう「自然法を容易に検査できる法則」）との関係である。積極原理が積極的徳としての慈恵や慈善を、また消極原理が消極的徳としての正義をそれぞれ意味するものと解釈するならば、両原理はかなり異なるものとなる。しかしながらホッブズは両原理の違いに言及しておらず、両原理を同一とみなしていたように思われる。

ホッブズが黄金律の消極原理だけでなく積極原理も（慈恵ではなく）正義に関するものと考えていたことは、『法の原理』における隣人愛に関する以下の説明から推測できる。ホッブズは言う。

「人々が平等に満足することは、自然法の基礎である。神法の第2の戒律として、マタイによる福音書22-39, 40には『隣人を自分のように愛しなさい、法の全体と預言者はこれら2つの法に基づいている』と記されている。それは、人間が隣人の利益を自分の利益と同じように熱望すること、あるいは人間が自分の財貨を隣人たちに分割すべきであると理解されるべきではなく、自分自身が享受しているすべての権利や特権を、隣人にも尊重すべきであると理解されるべきであり、自分自身に帰属すべきであると思われることはどのようなことでも隣人にも帰属すべきであると理解されるべきである。」(Elements, 100-101, 訳1274-75)

この引用文が示すように、ホッブズは、黄金律の積極原理を慈恵や慈善としてではなく権利の平等つまり正義に関することとして理解するのである。もしそうであるならば、積極原理と消極原理はいずれも正義に関することであり実質的な違いはないことになる。

4.2 自然法における自他の平等

ホッブズは、第2自然法に関連してあらゆる自然法の基礎となる平等原理としての黄金律を提示したあと、さまざまな自然法をいずれも黄金律の適用として説明している。つまりホッブズにとってさまざまな自然法はすべて平等に関する規範なのである。以下の自然法が、すべて何らかの意味における自他の平等（均等）を含意していることに注意すべきである（各自然法の後ろの[]内は筆者記入）。

第4自然法「恩恵を受けた人に対して利益を返せ」[受益と返報の均等、利益に関する自他の平等]

第5自然法「自分の自己保存に必要ではなく他人の自己保存に必要なものは手放せ」[自己保存の必要物に関する自他の平等]

第6自然法「許容せよ」[悔いあらためた他人の罪を許容する、自他の和解努力の平等]

第7自然法「復讐において過去の悪ではなく将来の善を見よ」[過去の悪を見ると過剰な復讐つま

り罪と罰の不均衡になりがちであるのに対して、将来の不正防止という善を見るならば罪と罰の均等になる、公平な処罰]

第8自然法「傲慢であるな」[過大な自己評価の禁止、自己評価と他者評価の平等・公平]

第9自然法「各人は他人を生来自分と平等な者と認めよ」[自他の平等]

第10自然法「尊大であるな」[自己評価と他者評価の平等・公平]

第11自然法「他人を裁くときには平等に扱え」[複数の他者の評価の平等・公平]

第12自然法「公共の物を平等に用いよ」[公共財の使用における自他の平等]

第13自然法「くじで平等に分配せよ」[くじによる自他の平等な分配]

(以下、第19自然法までであるが省略する。)

4.3 平等と自己保存の関係

以上のように、ホッブズはさまざまな自然法を黄金律の適用による自他の平等として説明している。他方で、すでに述べたように、ホッブズはさまざまな自然法を平和と自己保存を帰結としてもたやす手段として正当化している。つまりホッブズは、自然法の規範的根拠を平等と自己保存の2原理で二重に説明しているのである。ホッブズの主張を要約するならば、自然法は自他の平等を意味するのでそれ自体として望ましいものであり、さらに平和と自己保存を帰結としてもたやすので手段としても望ましいのである。

ここで大きな問題となるのは、自己保存と平等の2原理がどのような関係にあるのかということである。以下では、まずそれぞれの原理を認識する能力とは何かを検討したあと、次に2原理の関係について考察する。

ホッブズは、自然法が社会の平和と各人の自己保存に寄与することを「正しい理性」が認識すると述べている。したがって自然法を認識する第1の能力は理性である。では、自然法が平等原理としての黄金律に基づくことを認識する能力とは何であろうか。ホッブズの黄金律に関する説明は、『法の原理』『市民論』『リヴァイアサン』でしだいに変化している。かれは『法の原理』では、「何が自然法であるのかを即座に知るのにはどのような方法があるか」という題目の下に、次のように述べている。

「多くの言葉と大変な労力で書きとめられ推論されたこれらの自然法を見る者は、人が熟慮するほんのわずかの時間しかないあらゆる突然の機会に、言われている自然法を認識してそれらに従いながら行動するためには多くの困難と精妙さが必要とされると考えるかもしれない。われわれが、自然的平等を排除する傾向のある怒り、野心、貪欲、虚栄心その他の似たような多くの情念にとらわれている人間を考察するならば、それは真実である。しかしこれらの情念にとらわれずに、私のなすべき行動が自然法に反するか否かを即座に知りうる容易な規則がある。それは、自分が行為しなければならない相手の立場にあると想像し、次に相手が自分の立場にあると想像すること(That a man imagine himself in the place of the party with whom he hath to do, and reciprocally him in his)である。それはいわば尺度の交換である。というのは、すべての人間の情念は自分自身の尺度では重くなり、隣人の尺度

ではそうではないからである。この規則は非常によく知られており、『自分にしてほしくないことを他人に行うな』という古い格言によって表現されている。』(Elements, 96, 訳1268)

以上のようにホッブズは理性によって自然法を認識することが困難な場合にも、自分と相手の立場を想像上で交換することを通じて自然法を認識できると主張している。黄金律の平等原理の基礎にある認識能力は想像上の立場の交換を可能にする想像力なのである。したがって自然法を認識する能力は理性と想像力の2つであるということになる。

以上説明してきたように、ホッブズは、さまざまな自然法の根拠を自己保存と平等から二重に説明している。最後に残る問題は、自己保存と平等（黄金律）の2つの原理の相互関係である。この問題を考えるときに重要な示唆を与えるのは、先に引用した第9自然法である。そこでホッブズは、「自分たちは平等だと思ふ人々は、平等な条件でなければ平和の状態に入ろうとしない」(Leviathan, 107, 訳(1)249)と言う。つまり不平等な条件のもとでは人々は平和状態に入らず戦争状態にとどまるので自己保存が実現されないのである。それゆえ、自己保存を実現するために平和を命ずる基本的自然法に従って、第9自然法は平和を実現する手段として平等を命ずるのである。この論理では自己保存が最終目的であり、平和と平等は手段である。この「自己保存←平和←平等」（自己保存のために平和が必要であり、そのために平等が必要である）という目的手段関係を逆転させれば、「平等→平和→自己保存」（平等があれば平和が実現し自己保存が実現する）という因果関係となる。その否定文「平等の侵害→戦争状態→自己保存の困難」が、上述した因果関係である。

しかし自己保存が目的で平等が手段であるとしても、平等自体が自己保存や平和から論理的に導出されるわけではないことに注意しなければならない。平等の侵害が人々を怒らせて戦争状態を引き起こすのは、人々が自分たちは平等であるべきだと考え、平等をそれ自体として求めているからである。このとき、人々は平等を他のものを得るための手段としてではなく自己目的として求めていることに注意しなければならない。というのは、もし伝統的な身分制社会のように人々が不平等を当然視していて平等をそれ自体として求めることがない状況にあるならば、平等の侵害は人々を怒らせて戦争状態を引き起こすことはないし、自己保存を妨げることもないからである。

したがってホッブズにおいて自然法の根拠となる平等原理（黄金律）は自己保存から独立の価値原理である。平等の侵害は戦争状態を引き起こすので平和を実現するために平等を維持せよというホッブズの論理は、一見したところ平等を平和の手段としてのみ正当化しているように見える。しかし実際には、上述のように、平等は平和と自己保存の手段であるばかりでなく、独立の価値原理である。ホッブズにおいて自然法とその下で成立する権利は平等と自己保存という2つの独立した価値原理を持つのである。ホッブズが主張していることは、自然法と権利の第1の根拠は想像力による立場の交換を通じて直観的に判断される平等であり、第2の根拠は理性によって帰結主義的に推論される自己保存であるということにほかならない。ホッブズにおける自然法の判断原理は、平等に関する直観主義と自己保存に関する帰結主義の二元論である。

ここで、この二元論の思想的な位置づけについて簡単に述べておこう。シュトラウスが強調したように、若き日のホッブズが深く傾倒したのはアリストテレスの『レトリケ（修辞学、弁論術）』であっ

た (Straus, 1952)。アリストテレスが『レトリケ』で主張したのは、議会や法廷の弁論において、正しさと利益の両方を説くことの重要性であった。アリストテレス以前にも、プラトンは『法律』において法律の序文と本文とを区別し、序文では法が人々に幸福をもたらすことを説き、本文では法の正しさを説くという二元論を主張していた (Plato, 1970)。アリストテレスの『レトリケ』は、プラトンの二元論を立法・裁判などさまざまな弁論に拡張したものであった。プラトンとアリストテレスだけでなく、キケロなども含む古代レトリックに共通するのは、正義それ自体と正義の帰結としての幸福または利益の両方を説くという二元論であった。平等と自己保存を主張するホッブズの自然法論はこのような古代レトリックの二元論の方法を忠実に継承するものだったのである。

5 分配的正義の転換

5.1 古代的な分配的正義への批判と必要原理⁵⁾

ホッブズは『リヴァイアサン』において、分配的正義について、古代のアリストテレス以来主張されてきた「各人のもの」を各人の「価値 (merit)」に比例して分配することは恩恵 (Grace) であって正義ではない、と述べている (Leviathan, 105, 訳(1)106)。なぜなら、ホッブズの見解では正義と不正は契約に基づくものであり、公職や財などの価値に応じた分配の契約は存在しないからである。したがってホッブズは、『リヴァイアサン』では、古代的な分配的正義の観念を継承しながら、それは厳密には正義とはいえないと主張するのである。

しかし注目すべきことに、ホッブズは『リヴァイアサン』に先立つ『法の原理』では分配的正義について別の説明を行っている。ホッブズによれば、分配的正義は「同等の者に同等のものを与える」ことであり、「同じ権利を与える」ことである。ホッブズは「同じ権利」として「火、水、空気、生活する場所、生活に必要なすべてのものに対する権利」をあげている (Elements, 93-94, 1264)。つまりホッブズは、『法の原理』では、分配的正義を、公職や財の価値に応じた分配という古代の意味ではなく、人間の自己保存の必要物の平等な分配という近代的意味において理解するのである。そして『リヴァイアサン』でも、後述するように、必要物の平等な分配という思想は「分配的正義」とは呼ばれていないものの明確に主張されている。

ホッブズは、第2自然法で、契約によって放棄されずに留保される生命・身体・自由・財への権利について述べていた。さらにホッブズは、第10自然法でも、私有権を設立する契約によって放棄されずに留保される権利について次のように述べている。

「平和を求めるすべての人々にとって、一定の自然権を放棄すること、すなわちかれらが欲するすべてを行う自由を持たないことが必要であるように、いくつかの権利を留保することが人間の生命にとって必要である。その権利とは、自分自身の身体を統治する権利、空気、水、運動、ある場所から他の場所へ移動する道路を享受する権利、そしてそれがなくては人間が生きていけないか、またはよく生きる (live well) ことができないようなすべてのものを享受する権利などである。」

5) 分配的正義の概念の歴史と多様な意味については、新村 (2016b) を参照。

(*Leviathan*, 107, 訳(1)249-250)

ここでホッブズは、人間が留保する権利として、生命と身体への権利、空気や水への権利、運動の権利、道路を使用する権利、人間がよく生きるために必要なすべてのものに対する権利を含めている。これは、現代の生存権・社会権の端的な主張とみなすことができるであろう。

5.2 労働所有論と所得再分配

さらに留意すべき点は、ホッブズが、私有権の対象となるさまざまな財の中で自己労働の成果をとくに重視していることである。かれは、私有権の導入に先立つ自然状態について次のように語っている。

「ある人が植え、種をまき、建物を建て、便利な席を占有すると、他の人々が結合した力をもってやってきて、かれを追出し、かれの労働の成果 (fruit of his labour) だけでなく生命や自由を奪うことが予想される」(*Leviathan*, 87, 訳(1)209)

それゆえ人間は、私有権の制度を導入する社会契約を結ぶ。つまり人間は自然状態を脱することによって自己の生命・自由・労働成果に対する権利すなわち広義の私有権を獲得するのである。

ホッブズと同じ17世紀の思想家であるグロチウス、プーフェンドルフ、ロックらは、労働が私有権を生み出すという見解つまり労働所有論を明確に述べているのに対して、ホッブズはそのような労働所有論を明示的には語っていない。しかしホッブズが同時代の思想家たちと同様に労働所有論を保持していたことを推測させる記述は多い。たとえばホッブズは自然状態について次のように述べている。

「そのような状態 [自然状態] においては、勤労の余地はない。なぜなら、勤労の成果が確実ではないからである。したがって土地の耕作はない。航海も、海路で輸入されうる諸財貨の使用もなく、便利な建築もなく、移動の道具及び多くの力を必要とするものを動かす道具もない。」(*Leviathan*, 89, 訳(1)211)

この引用文において、ホッブズは、人々が自然状態を脱した後は、労働が私有権を生み出すようになり、労働の成果の私有権が保障される（勤労の成果が確実になる）と考えていることは明らかのように思われる。もし労働が私有権を生み出さないのなら労働の成果に対する私有権は保障されず、勤労の成果が確実ではない自然状態が続くことになるからである。

さらにホッブズは、第5自然法では、所得再分配（所得移転）の必要性を次のように説明している。

「性質がでこばこのために、かれ自身にとっては余分でありながら他の人々には必要なものを保持しておこうと努め、かつその情念が頑固なために矯正されえない人は、社会にとって厄介者として、社会の外に残されるか投げ出されるからである。すなわち、各人は、権利によってだけでなく、自

然の必要によっても、自己保存のために必要なものを獲得するためにできる限りの努力をすると想定されているのを見れば、余分なもののためにそれに反対する人は、そこから出てくる戦争について有罪であり、したがって、平和を求めることを命令する基本的自然法に反することを行うのである。」(Leviathan, 106, 訳(1)246-247)

ホッブズは、先に見た第10自然法において各人に必要なものを各人に分配するべきであると主張するだけでなく、この第5自然法では、各人が必要とせず他人が必要とするものを他人に与えるべきであるという所得再分配を支持する見解を述べているのである。ここでホッブズが具体的に何を想定しているかは明示されていないが、推測することは可能である。当時行われていた所得再分配は、教会などによる私的慈善とエリザベス救貧法による公的扶助であった。ホッブズが所得再分配に反対する人々を「性質がでこぼこ」と強く非難するとき、たんに私的慈善に非協力的な人々だけではなく、救貧法のもとで救貧税の支払いを嫌っていた富裕層を念頭に置いていた可能性は十分あるように思われる。

上述のように、ホッブズは、各人に分配されるべき必要物の中に空気や水のように労働生産物ではないものまでも含めている。つまりホッブズにとっては、分配における第1の基準は必要であって労働ではなかった。たとえ自己労働の成果でなくとも、各人の自己保存に必要なものはすべて「各人のもの」として私有権を保障されるべきなのである。

以上から、ホッブズは、近代的な分配的正義における必要原理と労働原理の両者を事実上考えていたと言えるであろう。しかもかれは、自己保存に必要なものは自己労働の成果でなくとも分配されるべきであると主張するのだから、必要原理は労働原理に優先すると考えていたのである。アリストテレス以来の分配的正義論の歴史において、ホッブズの転換は画期的であった。ホッブズは、分配的正義の基準を、各人の価値に比例する分配から各人の必要と労働に比例する分配へと事実上転換し、しかも必要は労働よりも優先されると主張したのである。

古代の平等論では、人間の価値が重視されたのに対して、近代平等論では、人間の価値を考慮せず、各人の価値に違いがあってもすべての人間は平等であると考えた。各人の価値とは無関係に、自己労働の成果や自己保存の必要物を平等に享受できるとき、いったんは価値への比例的平等が否定されて絶対的な平等が実現したかに見える。しかし労働成果や必要物の享受における絶対的平等は、各人の労働や必要の差異に注目するとき、一転して労働や必要に比例する不平等な分配が生ずるのである。

6 むすび

本稿の課題は、ホッブズが古代平等論を近代平等論へ転換させる上で果たした重要な役割について考察することである。

ホッブズの思想的出発点となったのは、アリストテレスの奴隷制正当化論への批判であった。アリストテレスは、人間の自然的能力の不平等を理由として、主人と奴隷の不平等を正当化し、この見解を、ホッブズは3つの論拠から批判した。第1は、自然的能力の平等、第2は、教育と経験による能力の発達、第3は、能力の平等と権利の平等の区別である。

これらのうちもっとも重要なのは第3の理由すなわち能力と権利の峻別である。ホッブズにとって、能力と無関係にすべての人間の権利が平等であるべきことをどのように論証するかが大きな思想的課題となった。この問題を解決するために、ホッブズは「権利の引き算」を行う。すべてのものに対して権利を持つ自然状態にある人々は、他人の生命・身体・自由・財に対する権利を相互に放棄する社会契約を結び、その結果、自己の生命・身体・自由・財に対する排他的私的権利を確立するのである。

各人の権利が平等であるべきことを、ホッブズは黄金律と自己保存という2つの根拠から説明している。人々は想像力で自己と他者の立場を交換することにより、自分にしてほしくないことは他人に行うべきでなく、自己と他者の権利が平等であるべきことを直観的に判断する。さらに、人々は平等な権利によって平和な社会が確立され自己保存が実現することを理性的に認識して、平等な権利を受け入れるのである。

ホッブズは、価値に比例する分配という古代の分配的正義を否定し、人間の価値と無関係にすべての人間の権利は平等であるべきことを主張した。この平等な権利には、各人の自己保存に必要な財と労働の成果への権利が含まれており、結果として、必要や労働に応じた分配という近代的な分配的正義の概念が生み出される端緒となったのである。

参 考 文 献

- Aristotle, 1995, *Politics*, (Baker, E., trans.), Oxford University Press. (山本光雄訳『政治学』岩波文庫, 1961年)
- Aristotle, 1926, *The "Art" of Rhetoric*, (Freese, J.H., trans.), Cambridge, Mass.: Harvard University Press. (戸塚七郎訳『弁論術』岩波文庫, 1992年)
- Bobbio, N., 1993, *Thomas Hobbes and the Natural Law Tradition*, (Gobetti, D., trans.), University of Chicago Press.
- Boonin-Vail, D., 1994, *Thomas Hobbes and the Science of Moral Virtue*, Cambridge University Press.
- Gauthier, D.P., 1969, *The Logic of Leviathan: The Moral and Political Theory of Thomas Hobbes*, Oxford: Clarendon Press.
- Hobbes, T., [1640] 1994, *The Elements of Law Natural and Politic*, Gaskin, J.C.A. (Ed.), Oxford University Press. (伊藤宏之, 渡部秀和訳『哲学原論 自然法および国家法の原理』柏書房, 2012年) (本文中で*Elements*と略記)
- Hobbes, T., [1642] 1998, *[De Cive]*, *On the Citizen*, Tuck, R. and Silverthorne, M. (Eds.), Cambridge University Press. (本田裕志訳『市民論』京都大学学術出版会, 2008年) (本文中で*De Cive*と略記)
- Hobbes, T., [1651] 1996, *Leviathan*, Tuck, R. (Ed.), Cambridge University Press. (水田洋訳『リヴァイアサン』(1)~(4), 岩波文庫, (1)(2)改訳版, 1992年) (本文中で*Leviathan*と略記)
- Niimura, S., 2016, "Adam Smith: Egaritarian or Anti-egalitarian?", *Internationa Journal of Social Economics*. (forthcoming)
- Plato, 2008, *Republic*, (Waterfield, R., trans.), Oxford University Press. (藤沢令夫訳『国家』岩波文庫, 上下, 1979年) (ページ数はステファヌス版全集による)
- Strauss, L., 1952, *The Political Philosophy of Hobbes: Its Basis and its Genesis*, (Sinclair, E. M., trans.), University of Chicago Press. (添谷育志, 谷喬夫, 飯島昇蔵訳『ホッブズの政治学』みすず書房, 1990年)
- Smith, A. [1776] 1976, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, Oxford: Clarendon Press. (大河内一男監訳『国富論』I~III, 中央公論社, 1976年)
- Tuck, R., 1989, *Hobbes*, Oxford University Press. (田中浩・重森臣広訳『トマス・ホッブズ』未来社, 1995年)
- Zagorin, P., 2009, *Hobbes and the Law of Nature*, Princeton University Press.

梅田百合香, 2005, 『ホッブズ 政治と宗教——『リヴァイアサン』再考』名古屋大学出版会。

梅田由香里, 2010, 『甦るリヴァイアサン』講談社。

太田可夫, 1971, 『イギリス社会哲学の成立と展開』社会思想社。

- 川添美央子, 2010, 『ホッブズ 自然と人為——自由意志論争から政治思想へ』 創文社。
- 小林弘, 1995, 「ホッブズの自然法第1条と第2条について」『英米文化』(25), 139-153。
- 高野清弘, 1990, 『トマス・ホッブズの政治思想』, お茶の水書房。
- 田中浩, 1994, 『ホッブズ研究序説: 近代国家論の生誕』, 改訂増補版, お茶の水書房。
- 新村聡, 1994, 『経済学の成立——アダム・スミスと近代自然法学』 お茶の水書房。
- 新村聡, 2016a, 「ホッブズ『リヴァイアサン』の第2自然法は何を意味するのか」, 『岡山大学経済学会雑誌』 47(2), 81-92。
- 新村聡, 2016b, 「アダム・スミスの平等論と分配的正義論」『立教経済学研究』 69(4), 49-67。
- 藤原保信, 1974, 『近代政治哲学の形成——ホッブズの政治哲学』(『藤原保信著作集 第1巻 ホッブズの政治哲学』新評論, 2008年)。
- 藪本沙織, 2009, 「ホッブズ道徳哲学における自然法」『実践哲学研究』 32, 37-78。

Formation of Modern Egalitarianism by Hobbes: From the Critique of Aristotle to the Golden Rule

Satoshi Niimura

Abstract

This article considers the role of Thomas Hobbes in the formation of modern egalitarianism. Aristotle argues that the inequality of free men and slaves is the natural and inevitable consequence of their unequal natural talents. Hobbes critiques this justification of slavery and insists that everyone has equal personal rights which he thinks are indifferent to the inequality of talents. To illustrate this, Hobbes formulates the subtraction theory of rights. First, he postulates the natural state wherein everyone has a natural right to all things, including the lives, bodies, liberty and goods of others as well as his/her own. Then, Hobbes theorizes that people make a social contract which obliges them to abandon their natural rights to the lives, bodies, liberty and goods of others, retaining only their own. Under this contract, the equality of everyone's rights is established by observing the Golden Rule, which obliges everyone not to do to others what he/she does not want done to himself/herself. After this subtraction of rights, everyone obtains equal personal rights to his/her own life, body, liberty and goods.